



「明るい民主県政をきずく香川県連絡会」は7日、香川県の池田豊人知事あてに、2025年度予算についての要望をしました。日本共産党県議会の権昭二県議が同席しました。

連絡会の8団体が参加し、教育、保育、雇用、中小企業支援、農業など9分野、78項目の重点要望を提出しました。

要望は、△子育て支援で18歳までの医療費無料化、給食費の無償化20人以下の少人数学級の実現、タブレット端末の公費負担の継続▽中小企業支援で物価高騰に対する負担軽減の直接支援策の実施、最低賃金引き上げへの直接補助制度の創設、特定利用港湾指定の撤回などです。

18歳までの医療費無

来年度の予算要望



定価 月行 所
100円
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13-14
☎(087)834-7311

県医労連が署名活動

香川県医労連は7日、JR高松駅前で「安全・安心の医療・介護を」と人員増と待遇改善を求める署名活動をしました。約20人が参加しました。



自アンケートで、回答した医療従事者の96%が「コロナ禍と変わらず忙しい」。また、83%が「できないので仕事をしている」と答えました。

日本では公務員も民間人も、日本人、外国籍の方も問わず命や権利が奪われている。斎藤元彦前兵庫県知事のパワーハラ問題で、亡くなった県民局長、県課長は名前がある人間だ。「赤木俊夫さんを、ウイシュマ・サンダマリさんを忘れない」と思いを強くしても、多くの人間が自死を選ばざるを得ないような人権後進国が日本だ。毎年いまだに自殺者が2万人以上出るのは、内戦や紛争・戦争が起きている国レベルで日本は異常だ。

国内外、政情は不安定で見通せない未来のなかでも、しかし精一杯、人権を守るために抵抗し、声をあげよう。声をあげる一人となろう。(ま)

保育問題連絡会が署名

1歳児の配置基準は国際的にも貧しいままです。さらなる改善とそのための財源確保は緊急の課題です。また、保育分野では、「子ども誰でも通園制度」の創設も盛り込まれました。これは、保育所等に通つていないうちに0~2歳の子どもを対象に、一定時間保育施設等を利用出来るようになります。子どもの命と安全、在園児への影響、保育者の負担増、責

任の所在など、不安の声があるにもかかわらず、国は2026年度から全自治体での本格実施を強行しようとしています。

小島烏水（本名・久太）は、百名ほどになり、同年十月に正式に発足をみた。ここに日本における近代登山が産声を上げたのである。一九〇七年の会員名簿には、島崎藤村、田山花袋、柳田国男、小山内薰らが名を連ねている。

高松市三番町（旧高松市女性センターの一角）に生まれた小島家は代々、高松藩家老側用人の家格であったが、明治維新で没落。一家は活路を求めて上京した後、一八九六年、横浜正金銀行（現・三菱UFJ銀行）に入り、登山家の烏水が広く読書界に迎えられたのは、「不二山」とある。

この年の春から、烏水は日本山岳会の設立のため中心となつて働いた。会則は英國アルバーン・クラブに範を仰ぎ、設立趣意書は烏水が書いた。会員は四部ありましたが、各団

が重要だ」とのべました。

世界』が企画した「文界十傑」投票で、紀行文の部において烏水が第一位に選ばれた（烏水7007票、大町桂月5516票、田山花袋2760票）。なお、

小説では藤村、翻訳では鷗外、詩では北原白秋、短歌では与謝野晶子が第一位に選ばれている。

烏水は紀行作家として確固たる地位を築いていたのである。

一九三一年、日本山岳会は会長制に移行し、初代会長に烏水が選ばれた。

一九八七年、『小島

鳥水全集』（全十四巻、別巻二）が完結する。

二〇一三年、高松市峰山公園の「はにわっ子広場」に「小島烏水顕彰碑」が建立された。

太鼓台界

マルティン・ニーメラー牧師の詩に「ナチスに共産主義者、社会民主主義者、労働組合員が連れ去られるときに声を上げなければ、彼らが私を連れさつたとき、私のために声をあげる者は誰一人残つていなかった」とある。

日本では公務員も民間人も、日本人、外国籍の方も問わず命や権利が奪われている。斎藤元彦前兵庫県知事のパワーハラ問題で、亡くなった県民局長、県課長は名前がある人間だ。「赤木俊夫さんを、ウイシュマ・サンダマリさんを忘れない」と思いを強くしても、多くの人間が自死を選ばざるを得ないような人権後進国が日本だ。毎年いまだに自殺者が2万人以上出るのは、内戦や紛争・戦争が起きている

国レベルで日本は異常だ。

国内外、政情は不安定で見通

せない未来のなかでも、しかし

精一杯、人権を守るために抵抗

し、声をあげよう。声をあげる

一人となろう。(ま)

讃岐の文学碑めぐり (22)

文・写真 深沢 雨根

高松出身の銀行マンにして登山家山岳文学元祖

小島烏水（うすい・一八七三～一九四八）

百名ほどになり、同年十月に正式に発足をみた。ここに日本に

おける近代登山が産声を上げたのである。

一九〇七年の会員名

式に発足をみた。ここに日本に

おける近代登山が産声を上げたのである。

一九〇九年八月、府立三中の

五年生だった芥川龍之介は、級友らと槍ヶ岳登山に出かけてい

ます。

「槍ヶ岳紀行」を書いている。

「山水無盡藏」を読んで大きな影響を受けていた。後に芥川は

「山水無盡藏」を読んで大きな影響を受けていた。後に芥川は